

CA1  
EA947  
B71  
#33 Jan. 1981  
DOCS



カナダ人物特集

1981年1月  
No.33

EXTERNAL AFFAIRS  
AFFAIRES EXTERIEURES  
OTTAWA  
FEB 11 1981  
LIBRARY BIBLIOTHÈQUE

トピックス——2

カナダと北海道・伊藤友晴——3

カナダの人物——4

消え去った夢／一政治家の死をめぐる——平野敬——14


カナダ特派員日記③・橋田忠明——15

カナダ人の発明発見(VIII)——16

編集後記——16



Bulletin Canada

発行  カナダ大使館



# TOPICS

## テリドンを実用化

文字・データの双方向通信システム・テリドンを使った世界最初の通信サービスが、今年四月、マニトバ州南部で始まる。

これは地域に住む三万人の農家を州政府の農業担当者、コミュニケーション・センター、穀物集積場などのコンピュータ・ターミナルと結び、農産物の市場価格、飼料の価格、穀物の先物価格などについて刻々入る情報を提供しようというもの。

なお、テリドンは、ヨーロッパの二つの文字・データ通信システムと共に、国連から国際基準として公認されている。

## 憲法問題、今年に繰り越し

憲法のカナダ化と一部修正を折り返した「新憲法法案」は、昨年十二月末までに連邦議会での審議を完了する予定であったが、各州や野党との意見を調整し、論議を済すため、今年に持ち込まれた。トルドー首相としては、この審議延長にもかかわらず、今年七月一日の建国記念日（カナダ・デー）までには正式に憲法を英国から移

管し、カナダ法として定めたい意向である。

（なお、現憲法 British North America Act は、これまで「英国領北アメリカ条約」と訳されてきたが、制定された当時の英国の対アメリカ植民地向け法令（Act）がほとんど「法」と訳され、また今日の日本では条例は地方公共団体の制定する法令を指すことを考え、今後は「英国領北アメリカ法」に統一したい）

## 超大出力の電球を開発 二三個で球場を照明

二三個の電球でフットボール・スタジアムや球場を日中と同じように超大な出力をもつ電球が、バンクーバーのホルテックス・インダストリーズ社で開発された。おそらく世界一強力な電球だろう。出力十万ワットというこの電球の秘密は、うず巻き状のガラスにある。これまでの高出力電球を作る実験は、電球の中に入れてみるアークが電球のガラスを破壊したために失敗していたが、アークはガラスのうずみに包まれてうずの中心部へ向かうため、ガラスはこわれない。

昨年八月にバンクーバーで開か

れた太陽熱会議におけるシミュレーション・テストでは、八フイート平方の範囲内で赤道直下と同程度の明るさが得られた。これで照射されたカーペットは急速度で変色し、塗料ははげ落ちた。

ホルテックスでは、屋外の投光照明に適した高出力電球を開発しているが、この電球は夜間の海上救援や屋内農園などにも利用できそうだという。

## レシエ総督が死亡

カナダの第二十一代総督（一九七四—七九年）であったシユール・レシエ氏（写真）が、十一月二十六日、脳卒中で死亡した。六十七才。

レシエ氏は、総督に就任してから半年後に脳卒中で倒れ、左半身がやや不随となり、言語にも障害をきたしたか、言語訓練などを通して徐々に回復、夫人の助けを借りながら総督の任務をこなしていた。



M. Bedford

レシエ氏はソルボンヌ大学で博士号を得たあと、日刊誌「ル・ドローア」の編集者、オタワ大学の教授、マッケンジー・キング首相の

補佐官、ルイ・サンローラン首相の補佐官、外務次官、メキシコ、欧州共同体、イタリア、フランス、ベルギー、ルクセンブルグ各国の大使などを歴任、七四年一月、カナダ出身としては四人目、フランス系カナダ人としては二人目の総督に任命された。

レシエ総督の在任中の大きなできごととしては、それまでエリザベス女王がカナダの外交官に信任状を交付して外国に派遣し、あるいはカナダの名において条約に署名していたのを、カナダ政府がやるようになったことが上げられる。

## 今年の移民は十三万人に

ロイド・アクスワーシー雇用・移民大臣によると、カナダの今年の移民受入れ数は十三万から十四万人の予定。これは国内労働市場の状況と、家族呼び寄せや難民受入れという政策を勘案して決めたもの。

受入れ予定の十三万ないし十四万人のうち、一万六千人は政府援助による難民に割り当てられる。民間で引き受ける難民はこれに含まれていない。

## トルドー首相が外遊

トルドー首相は、今夏オタワで開催される先進七か国首脳会議（サミット）を控え、十一月にサウジアラビア、北イエメン、エジプト、西独、フランスを訪問した

のをはじめ、今月に入ってオーストリア、アルジェリア、ナイジェリア、セネガル、ブラジルの五か国を歴訪した。

## 新銀行法、外銀進出を認める

カナダの銀行法が十三年ぶりに改正され、昨年十二月一日付けて新銀行法が施行された。

今回の改正の主目的は、これまでカナダの五大銀行の寡占状態にあつた国内金融市場を外国銀行に門戸開放し、外国との互恵主義を実現するとともに、銀行間の競争を活発にすることにある。

現在、カナダでは米国資本を中心に、外国の銀行約百五十社がファイナンス・カンパニーを営業し、または駐在員事務所をおいている。各銀行の政策および連邦政府の方針にもよるが、これらの大半が市中銀行を開設するものとみられている。

ただし、新銀行法では、外銀全体の総資産をカナダ市中銀行の総資産の八パーセント以内とする、役員のおよ半数はカナダ人とする、支店開設はそのたびに大蔵大臣の許可を必要とする——などの条件をつけている。

## 訂正

○前号二ページ目の新予算案に関する記事の中で、「二つの新税により今後三年間に見込まれる税収は百十七万ドル」となっているのは「百十七億ドル」の間違いです。



# 北海道とカナダ 広がる交流の輪

伊藤友晴

北海道の空の玄関千歳から札幌まで、車で約一時間の道のりは、ゆるやかに広がる石狩平野を縫って、やがて都心に達する。

カナダからのお客様は、この風景を自分の国によく似たながめたと評する。

北海道とカナダの交流が、このところ、文化、経済、スポーツなどあらゆる分野で高まりを見せている背景には、雪とか寒さなどに加えて、こうした共通、類似する自然環境が大きな役割を果たしているに違いない。

北海道では、「ほっほうけん」という言葉が、この数年急速に人々の生活の中に定着しはじめてきた。北海道と気候風土が似かよっている北国の人々との交流を通じて、お互いの生活、産業をいっそう発展させようという趣旨、つまり「北方圏」交流である。そして共通する自然の中で営まれる生活の知恵を互いに交換し合おうとする努力は、いま、人と人の心の交流にまで至らんとしている。

一九七九年、北海道カナダ協会が呱呱の声をあげたのは、まさに

そうした気運の高まりの中においてであった。しかし、北海道とカナダの交流の萌芽は、この時よりもはるかに早い。その中の一つに、地域単位の姉妹提携がある。

もっとも古い姉妹提携は、北海道の東部、釧路市と、B・C州バーナビー市との間で結ばれた。一九六五年九月のことである。バーナビー市はバンクーバーに隣接し、釧路市とはほぼ同緯度という共通性を持っている。一九八〇年十月、釧路市は市長をはじめとする三十名の市民を、姉妹提携十五周年記念友好使節団として派遣した。この初めての試みは、バーナビー市民の心からの歓迎を受け、大きな



成果へつなげた。一九六九年には、北海道のほぼ中央に位置する名寄市が、オンタリオ州リンゼイ市との間に姉妹提携を成立させた。名寄市に在住するカナダ人、ハウレット夫妻の橋渡しといわれる。その後、市と友

好委員会が協力し、隔年ごとに友好使節団、交換留学生を派遣し合っている。一九八〇年八月には、名寄市開基八十年記念の一環として、二十八名の児童がリンゼイ市に派遣され、小さな親善使者のつとめを果たした。

北海道を代表する十勝ワインの産地池田町は、一九七七年、B・C州ペンティクトン市と姉妹提携を結んだ。ワインなどの産業視察がきっかけといわれるが、それ以



来相互に訪問団を派遣し合い、一九七九年からは留学生の交換も行なうなど交流は極めて活発である。その成果の一つとして、いま池田町は道内でもっともカーリングの盛んな町となり、冬期間は町民相互のカーリング競技会が盛んに行なわれている。

上砂川町は、空知管内夕張山地の西部にあり、日本でも有数の緑豊かな炭鉱の町である。この上砂川町が一九八〇年九月、同じ炭鉱の町、B・C州スバウッド町と姉妹提携を結んだ。一九七〇年、砂

川鉱業所の水力採炭技術者をスバウッド町に派遣したことがきっかけとなり、実現の過程をたどったものである。理想の石炭産業都市づくりをめざす二つの町にとつて、この提携が未来を照らす明るい指針となることが期待されている。

市あるいは町規模での姉妹提携が促進される一方で、一九八〇年秋には、北海道とアルバータ州自体の提携が道民の関心をさらった。この両者の交流は、一九七二年、堂垣内北海道知事を団長とする「カナダ・アラスカ経済文化視察団」のアルバータ州訪問を端緒とし、やがてスポーツ指導者、酪農研修生等の交換、文化・芸術の交流などが活発に行なわれるようになった。

その後、一九七四年、札幌で開催されたアルバータ・フェアに出席したホーナー同州副首相から提携についての意向打診があり、一九七九年、エドモントン市で開催された第二回環境会議で話は急速に進展した。

調印式は、一九八〇年九月五日アルバータ州エドモントン市、同じく十月十七日には北海道札幌市の双方で行なわれ、北海道からは寺田副知事が、またアルバータ州からはジョンストン対外大臣が、それぞれ代表として派遣され、友好裡に調印を終えた。

その後、北海道カナダ協会森鼻会長夫妻のエドモントン市訪問、アルバータ州政府ラメシヤー文化庁長官一行の札幌市訪問と、両者

の活発な交流が続いている。

ロッキーマウンテンの水を伝う一滴の水が、やがて岩を噛む激流となり、あるいは大雪山の雪をとかす細い流れが、とうとうと平野を流れる



カーリングを楽しむ北海道の人々。

大河に変ずるように、いま私たちの心に植えつけられた北方圏交流、カナダとの友好の芽も、今後ますます強く、また大きく実っていくことであろう。

そして、国をこえた心のつながりを深め、友好の絆の中で地域を、あるいは生活を、より豊かなものにしていくという人の心がある限り、北海道とカナダの交流の輪は、さらに大きく広がっていくものと確信している。

(北海道カナダ協会事務局長)



# カナダの人物

カナダの人物——といっても、日本ではほとんどなじみがない。カナダが生んだ人物は多い。そしてその一人一人が、何らかの意味でカナダという社会あるいはその国民性を反映する。そこで紙面が許す限り、各方面からできるだけ多くの人物を——かなり恣意的に——選び、紹介してみた。ここにあげた人たち以外にも、ノーベル平和賞に輝いたピアソン元外務大臣、トルドー現首相、経済界の雄E・P・テイラーやポール・デマレー、文芸評論家のノースロップ・フライ、歴史家のドナルド・クレイトン(一九七九年没)、作家のモーリー・キャラハンやマーガレット・アトウッド、分光学的世界的権威ヘルツバーグ博士、ジャーナリストのピーター・ノーマンやブルース・ハチソン、歌手のアン・マレーやゴードン・ライトフット、アニメ映画の巨匠ノーマン・マクラレンなど、カナダを代表する人物は枚挙にいとまがない。この中には、本紙ですでに取りあげた人たちもいるが、いずれにしても、紙面の都合上、紹介は他日に譲りたい。

## カナダ随一の歴史作家

### ピエール・バートン

すでに二十数冊の著書を持つピエール・バートンが、一九七九年には一冊も出さなかった。この中断に別に意味はないのだろうか(彼ならこの先、もう二十四五冊は書くにちがいない)、とにかく驚きではあった。なにしろバートンは——土曜の夜のホッケーとか、下院をはじめとする国家機構の質問期間と同じくらいに——キッチリとスケジュールを守って仕事をする人物だと思われるからだ。彼はこの国でもっともよく知られた歴史家(「ナショナル・ドリーム」「ラスト・スパイク」「デイオンヌ・イヤーズ」など)であり、テレビのパーソナリティとして、またプロデューサー(「ナショナル・ドリーム」「ラスト・スパイク」「デイオンヌの五つ子」などの制作)として輝やかしい成功をおさめているが、本質的には素朴でさっぱりした北部の申し子であり(「クロンダイク」「クロンダイク」とともに「漂流家族」)、そして七人の子供の父親である。彼の仕事ぶりはみごとに組織的なもので(専任の調査員バーバラ・シアーズは

印税の三分の一を受け取っている)、巨額の稼ぎをあげた。「マーケット」がなかったらこの材料を書くことはなかったでしょう——マクリン誌のジュディス・ティムソンに彼はこう述べている。

「漂流家族」で、彼は妻と子供たちと共に自分の父親が何十年も前に通った道をたどって、ユーコンの流れを下る筏の旅を描いている。

「父はきっと、金を見つけるチャンスはほとんどないということを知っていたに違いありません。しかしあの一八九八年の春には、戦争に出かけるようにして皆がクロンダイクを目指していたのです。ニュー・ブランズウィックの住人の半数くらいが大陸を横断できる貨物列車を利用して北西部へ向かっている感じでした。父と同じ列車に乗り合わせたのは五百五十人。ほとんどの男たちはそれまで山と山の間を歩いたことのない連中です。父もその一人で、すっかり有頂天になって



しまいました。へこちはすばらしい景色です。彼はバンクーバーのオリエンタル・ホテルから、セント・ジョンにいる



母親へこう書き送りました。へ山なみはどこからみても麓からけわしくそそり立っていて、まるで私たちの上に倒れかかって押しつぶそうとするかのようにおおいかぶさっています……」

「父は二年間だけやってみるつもりでユーコンへでかけたのですが、二年が実際は四十年にのびたわけです……」

「へふしぎだね」ってピーター（バー tonの長男）がいうんです。へだつて、お祖父さんがこの湖にいたことがあるって考えるとね。ぼくたち子供がこんな旅をするようになるだろうなんて、きつと考えもしなかっただろうね……」

## 最もカナダ的な作家

# ヒュー・マクレナン

ヒュー・マクレナンはもつともカナダ的な作家である。一九四一年の「パロメーター・ライジング」をはじめ、それに続く五冊の著作のなかには今や古典となった「二つの孤独」がふくまれている。この作品には、この国の歴史を形成してきたフランス系とイギリス系カナダ人の分裂の様相が詳細に描き込まれている。

マクレナンはケープ・ブレトン島の生まれで、モントリオールに住んでいるが、自分のことをスコットランド人とみなしている（彼の家系は何代も前からのカナダ人なのだ）。従来、彼は説教臭が強い

といわれてきた。以下の引用は、よい作家は小さな町でこそ育つという彼の信念をのべたエッセー「石を落とせば」による。

「自分の町のことなら、町の大金持連中がどうやって一財産作ったか、みんな細かいところまでわかっている。ノイロ



Nakash

ーゼと精神病の違いは知らなくても、ある男を狂暴にし別の男を卑屈にする、あるいはある女を魅力的にみせ、別の女は口やかましくさせる家庭の事情についてならお手のものだ。私たちに、ずっと頭のよい都市生活者には欠けている第六感——つまり時間の感覚というものがあ。私たちは家族というものは、ローマと同様、一日にしてなるものではないことがよくわかっているのだ。」

「ある一つの家族をみてみると、今は亡き祖父について聞いたことを想い出すだろう。彼はいつみてもズボンつりをかけた姿で貸し馬屋の前の椅子に腰をかけたワラをかみながら時折り左手の親指をあげて頭をかいているのだった。いらいらしてかくのか、それとも本当にシラミがいるのか？と興味めくようになっていた。

この家の父親は今も元気だが、金物屋の商売をうまく切り盛りしている中年男だった。こちらは頭はかかないが、よく見ると奇妙なくせがあった。街を歩いていく途中で突然立ち止まり、ズボンの右すそをあげてふくらはぎの後側をかくのである。金物屋にシラミがないことはまちがいない以上、この動作は親譲りのものらしい。かくしてあの老人の不潔さについてのあらぬ疑いは晴らされたわけである。息子の代になってこの一家は一段階昇進した。彼は大学に入り、成績もよく、今ではオタワの行政機構で出世の基礎をかためつつある。おそらく彼は大臣クラスまで昇進して私たちの自慢の種になることだろう。噂では、首相も彼に目をかけているということだ。ちなみに、彼が体をかいているところはまだ誰も見たことがない。」

## TVの科学番組を担当する 遺伝学者

# デイヴィッド・スズキ

デイヴィッド・スズキは一見テレビのカッコいい若い刑事に似ている。ししゅうの入ったデニムのシャツでスポーツ・カーを歩道にまでぶつとばすあれである。事実彼はテレビのスターだし、時にはししゅうのシャツも身につける。しかし一方では、寒くなると死ぬ果実バエの变种を培養して、害虫を抑制する新種を作り出した、レッキとした遺伝学者なのである。

今年四十三歳のスズキは、年よりも若くみえる。現在科学界でどのようなことが進行しているかを専門用語を使わずに一般の人々に知らせる、カナダ放送協会の「サイエンス・マガジン」という番組の主演としてカナダ中で有名だ。

科学は我々を救う前に破滅させてしまうこともありうる。スズキは考えている。なかでも遺伝学は彼の主たる心配の種である。オックスフォードでは科学者たちはネズミの胎児からとった細胞をメスのハツカネズミに移植して、七〇パーセントがハツカネズミで三〇パーセントがネズミという子孫を作り出した。さらに驚くべきことには、人間の細胞をネズミや魚や鶏の細胞と結合させた科学者さえ存在するのである。今まで存在しなかったような生物を創造できるのである。だが、こうした人々の思慮分別をスズキは信用していない。

「こういう人々の行為を私は疑問だと思えます……。もしノーベル賞をもらえようような実験をやめなければならぬことになったとしても、この連中は決して





Canadian Broadcasting Corporation

こうした実験をやめないでしよう。」  
自らの人生経験からすると、スズキには全ての人が正しく行動するものとは考えられないのである。スズキの一家は彼が五つの時、プリティッシュ・コロンビア州スローカンに送られた。西海岸の日本人を収容する収容所であった。彼は孤独な、きびしい人間に成長した。そして奨学金をもらってアマースト大学で学ぶようになってから、遺伝学のとりこになった。「まったくすばらしかった。最

高に厳密かつ論理的で」と彼はあとで述べている。

シカゴ大学で博士号を取った後、テネシー州のオーク・リッジ国立研究所に採用された。そこではちょうど市民権運動が始まったばかりであった。彼は全身全霊をあげてその渦中にとびこんだ。カナダへ帰るとまずアルバータ大学に、ついでプリティッシュ・コロンビア大学に移った。一九六七年に彼と五人の研究員たちは一つの論文を発表する。「キイロシヨウジヨウバエI型における温度感覚の変異——ガンマ線および化学誘導による伴性劣性致死因子および半致死因子間の相関度数」がそれである。これは害虫制御に関する画期的な研究であった。もともと論文のタイトルは、スズキには虫の好かない専門用語の羅列ではあったが。

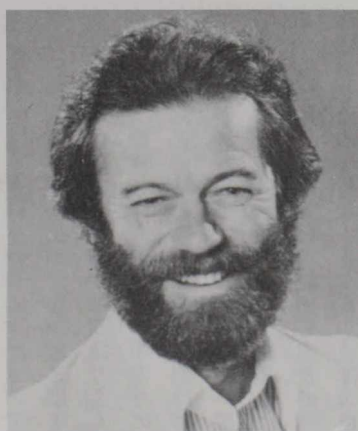
「科学的な活動や用語を神秘化すれば秘密を作ってしまう。こうして秘密主義がはびこってしまうのです。それをなくすることならいくらでもできますよ。」  
というわけで、彼はエドモントンとバンクーバーのテレビとラジオ番組に出始めた。それからCBCが「スズキ科学を語る」というささやかな全国向けのショー番組を提供した。「サイエンス・マガジン」は四年前放映を開始したが、たちまち水曜の夜八時というゴールデン・アワー番組に成長した。  
一九七七年の秋にはスズキはプリティッシュ・コロンビア大学と果実バエのものに帰っていった。

## 俳優・劇作家・作曲家

# ゴードン・ピンセント

「無法者」ゴードン・ピンセントは俳優であり、劇作家であり、小説家であり、作曲家でもある。

彼の収入は六桁まで飛び上がって、そこで急にストップした。そのつもりならもっと稼げただろう。



Canadian Broadcasting Corporation

「今までの五年間に、そうだな、二十万ドルくらいのテレビ・コマースの仕事を断わってきたかな。やりたくなかったんだ。一つにはただのタレントになりきっちゃうのがいやだった。物を書くのは性に合ってる。作家は俳優よりずっと頭を使うからね。タレントの頭なんてからっぽさ。」  
むろんゴードンの方はビッシリ詰まっている。彼はニューファンドランドのグランド・フォールズ生まれで、若い頃にはバナラ・エクスから液体靴みがき剤にいたるまで、ありとあらゆるとんでもな

いものを飲みまくった。一九五九年にトロントの古いクレスト劇場の端役と、ストラットフォード・シエークスシア祝祭劇場でもちよい役をもらってやっと落ち着くことになった。六〇年代の中頃にはムーズ・フォールズ出身の気取り屋議員の物語「クウェンティン・タージャンス議員」の役をもらって一躍テレビの名士となる。

一九六九年ハリウッドへ移って六年間いた。いろいろやってみたがスターにはなれなかった。一九七〇年に「無法者」を思いつき、苦勞したあげく、トロントで映画化に必要な金を出させることに成功した。

映画では彼があのだらしのない陽気なニューフィー（ニューファンドランド人）の無法者ウイル・コールの役をやっている。この作品は興行成績はそれほどでもなかったが識者には認められた。そしてこの作品の本質的な部分はその後の彼の創作活動の焦点となったのである。

この作品を彼はおよそ考えられる限りの演劇形式で書き直して使っている。  
「いい作品だが、もっとよくなるはずだった」——マクレーン誌上で彼はこう語っている。「あとほんの少しばかり慎重さと時間ともっとたくさんの子算があればよかったんだ。あれは単なるストーリーじゃない。おれの人生そのものなんだ。だからもっと完璧なものにするために本にしたんだ。」  
本はうまくいった。そこで彼はのちにこれをミュージカルにして、シャーロット



トタウン・フェスティバルで上演した。彼自身の台本と歌詞で、演出も主役も兼ねている。

今や彼は四十代半ばの、最も油の乗り切った状態にあるようだ。

## 「ファイブ・ビジネス」の著者

# ロバートソン・デイヴィス

その著書と同様に有名な、深遠で複雑な、ドラマティックな人物であるロバートソン・デイヴィスには二十篇をこえる小説——その中にはあの偉大なる三部作「ファイブ・ビジネス」「ザ・マンティコア」「ワールド・オブ・ワンダーズ」が含まれている——のほか、戯曲やエッセイも多い。彼はまたトロント大学のマッセイ・カレッジの学監でもある。

彼は余技的な著作の一つで、悩める者たちに対する根本的な救済を説いている。本の名前は即ち、「サミュエル・マーチバンクスの年鑑 占星学的・霊感的便覧——性格分析・魅力の秘訣・健康へのヒント・パーティで成功する法・身体上のホクロの位置による占い・その他若干の秘密情報を初公開——付録 魔術師マーチバンクスの書簡・随想・語録・独言など満載」という。以下、無限の多様性に満ちた警句のいくつかをこの「年鑑」から抜粋してお目にかけてよう。

「誠実さにも限度というものがある。さもないと、君の家は失なわれた大義のゴミ捨て場になるばかりか、手に負えない連中の避難場所になってしまうだろう。」

「知恵は変わりやすい持ち物だ。狂犬に追われれば誰でも賢く行動する。が狂った女に追いかけて無事なのはほんの少数者だし、気狂いじみた考えの前では、最高の知恵者だけが生きのびられる。」

「予言は、不可避の事実を不可能という恐るべき光に注意深くひたした上で、まっさきにそれを発表することによって成立する。」

「四十五歳以後の男と女の相違は、賢者と愚者、全体と断片、生存者と脱落者の違いにくらべると取るに足りない。」



Libby Joy

「それについて書かれた本の多さからみると、我々にとっては東洋人の姿勢や呼吸法を取り入れることによって彼らの精神的な偉大さに到達するのは簡単なことである。ところがおかしなことに、東洋人の方では誰一人、我々の姿勢や呼吸をまねることによって科学的、政治的技術を発展させることができるとは信じていないようだ。」

「勝っている時こそ最も注意すべきなのだ。なぜなら、君の方ではダウンしている相手をなぐりはしないが、相手の方はあわよくば君を蹴り上げてやろうと思っているに違いないからだ。」

## エスキモーの版画家

# ケノジュアク

ケノジュアクは、イヌイット（エスキモー）出身としては、最も賞賛された芸術家であろう。北西準州ケープ・ドーセットの、五十家族ほどしかない小さな村に住む彼女は、空想的なフクロウのグラフィック・イメージを得意とする版画家・彫刻家で、一九五〇年代末に創作を始めたばかりというのに、一九六〇年の作品「魅せられたフクロウ」で一躍世界的な名声を得た。

ケープ・ドーセットに版画を紹介したのは、日本で版画を学んだジェームズ・ヒューストン氏である。イヌイットの「版

画事始」について、ヒューストン氏はこう書いている（本紙第二三号）——。



ケープ・ドーセット住民の間で版画作りがはじまったのは、一九五九年の冬である。ある日のこと、私のそばに坐って、政府の砕氷船で運ばれてきた何箱かのタバコをじっと見ていた、オシャウィートックという名前の狩りのうまいエスキモーが尋ねた。

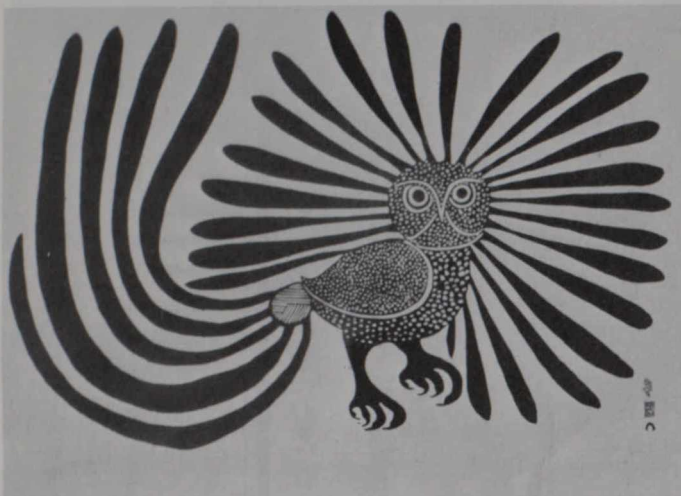
「それぞれの箱に、全く同じように小さく船乗りの頭の絵を描くのは、大変骨が折れるだろう」

「われわれは、そんなやり方はしないよ」と私は答え、エスキモー語で近代的な写植印刷の方法について説明しようとした。私の説明は、どうもうまくいかなかった。凹版印刷とか色刷りの重ね合わせ（見当）などを説明する適切なエスキモー語を私が知らなかったせいである。

（略）

印刷というものを実際にやって見せる方法はないかと、私はあたりを見回した。そのとき、オシャウィートックがしとめてきたアザラシの牙が目についた。オシ





ケノジュアク作「魅せられたフクロウ」

By permission of West Baffin Eskimo Cooperative ©1960

ヤウイトックは、それをみがいて、その上に動物の絵を大胆に、そして深く彫ってあった。  
私は半ば凍ったインクの入った缶をもつてきて、指で黒いかすをすくって牙にまんべんなくぬった。その上に、注意深く一枚のトイレット・ペーパーをのせ、軽くなでつけたあと、その紙をはがした。紙には、オシャウイトックが彫ったデザインが、裏返しになってうまくうつっていた。

「それならわれわれにだってできる」  
彼は狩人らしくきっぱりと言った。

こうして版画が取り入れられ、今ではケーブ・ドーセットは版画村として知ら



わたるほどになった。「村の人は誰でも描けるけど、そのうち二〇人ぐらいがごくうまい」と彼女。作品は村で厳選された上でトロントなどの市場に出されるが、評判がきわめて高く、いずれも高値でさばかれている。

ケノジュアクが一九六〇年に制作した「魅せられたフクロウ」は、羽根と尻尾を広げ、誇り高い表情をしたフクロウ(知恵の象徴とされる)を描いたもので、二十五枚が黒と赤、あとの二十五枚が黒と緑で刷られた。北西準州開基百周年の一

九七〇年には、記念切手のデザインにも使われた。  
その同じ年、彼女は夫のジョニーエボと一緒に、大阪万博のカナダ館にせつこの大壁画を制作している。

今年六十三才のケノジュアクは、今も熱心に創作を続けている。これらの絵や版画は、彼女によると「鳥の羽ばたきのように私を襲ってくるアイデア」を圖案化したものが多い。

### インシュリンを発見

## フレデリック・バンティング チャールズ・ベスト

「肉が溶け去り、尿となって流出する」と、二千年も前から恐れられていた糖尿病。糖尿病にかかると、糖分がエネルギーに転換せず、体は蓄積された脂



National Film Board, Ottawa

肪や蛋白を消化するようになる。のどがひどく乾き、大量の水を飲んで、大量の甘い尿を排出する。食欲が異常にわく。唯一の治療法は、食事を厳しく制限して、体内の化学的バランスを正常に戻すしかなかった。腹一杯食べて死ぬか、カロリ

ーを極端に減らしてふらふらと過ごすしか、道はなかったのである。  
しかし一九二一年、カナダの若い二人の科学者がインシュリンを発見してから、これが糖尿病の特効薬となり、それまで不治の病として恐れられていたこの病は、それほど危険ではなくなった。

インシュリンを発見したのは、フレデリック・バンティング(写真)とチャールズ・ベスト。バンティングは第一次大戦に医師として従軍したあと、オンタリオ州ロンドンで整形外科医を開業していたが、一

か月の収入がわずか四ドルしかなかった。こともあるほど経済的に恵まれなかった。そのわずかの収入の道を捨て、器具や本を売り払って、新しい実験に乗り出した

のだった。当時二十九才で、研究者としての経験はほとんどなかった。相棒のベストはまだ二十二才。生理学と生化学で修士号をとるため勉強中の大学院生であった。  
二人は、トロント大学のジョン・マクロード生理学部長から、同部長がヨーロッパ旅行の間という条件で実験施設を借り受け、糖尿病をおさえる物質を探すことになった。

ほとんどの人たちが糖尿病にかからないのは、何らかの天然の物質のせいだ、と二人は確信していた。一八八九年に、フランスのオスカー・ミンコウスキーが、膵臓をとった犬は糖尿病で死ぬことを明らかにしていたため、二人はその物質Xは膵臓で分泌されているはずだと考え、犬の膵臓を使って実験をくり返した。そして、消化液を分泌する細胞から膵臓への導管をしばると膵臓がはやく変形することが分った。しぼんで変形した膵臓は消化液の製造をやめ、物質Xを破壊するものではなくなる。そのXを抽出して、糖尿病にかかった犬に与えれば、血液および尿の中の糖分をへらすはずだ……。  
実験にとりかかってからおよそ二か月半後の七月二十七日、ついにきれいにしぼんだ膵臓が得られた。これを冷凍して粉にし、ろ化したのち、死にそうになっ



ている糖尿病の犬に注射したところ、血液中の糖分は着実に減り、二、三時間すると犬は立ち上がって尾を振るほどになった。ほとんど奇跡に近かった。物質Xはあったのである。この物質は初めアインレットインと名づけられたが、のちにマクロード教授の提案でインシュリンと改名された。

翌年一月、レオナード・トムソンという、二年間も糖尿病をわずらい、体重も三〇キロに減ってあと二、三週間しかもたないだろうと思われていた十四才の少年に、インシュリンが注射された。糖尿病にかかった人間への、初めてのインシュリン注射である。

トムソン少年は、まもなく元気を回復し、普通の食事がとれるようになり、そげた類もふくらんだ。彼はあと十三年も生き延びたが、死んだのは糖尿病のせいではなく、オートバイ事故のあとにかかった肺炎が原因だった。

一九二三年、バンディングにノーベル賞が授けられた。彼はその賞金を、ベストと折半した。

ガン撲滅のために片足で  
五、〇〇〇キロ走破

## テリー・フォックス

五千三百キロ、というと、いかにマラソン選手でもためらう距離だ。それを、

ガンで片足を失くしたカナダの青年が、およそ五か月をかけて走り抜いた。途中でガンが肺に転移しなければ、おそらく予定通りカナダの東端から西端まで八千三百余キロを完走していただろう。ガン撲滅のために。そして自分自身のために。

テリーが右足をひぎのすぐ上から切断されたのは四年前、十九才のときである。運動神経が抜群で、通学していた高校でその年の最優秀スポーツマンに選ばれたばかりだった。ある日、右足に痛みを感じ、それがガンのせいだと分り、三日後に切断された。スポーツ方面に進みたいという彼の夢は、一夜にしてくずれてしまった。

しかし、テリーはくじけなかった。間もなくサイモン・フレージャー大学（ブリティッシュ・コロンビア州）に入学した彼は、ガン研究のための寄付を呼びかけ

ようと、大陸横断のマラソンを決心する。

「私は夢を見ているのではありません。これ（マラソン）によってガンに対処する確実な答えや治療法がでるとも私は考えていません。しかし私は奇跡を信じます。信じなければならぬのです」——テリーは、このように述べて支援を仰いだ。

当初は、いったんこうと決めたらやり通す彼の頑固さを知っている父親でさえ、「本気か」と驚いたほどだったが、家族やガン協会を中心に、周囲の理解も高まっていた。

同時に、テリーは練習を始めた。最初はその故郷ポート・コキトラムの町の通りを、一キロほど右の義足をいたわりながら走った。それを毎週一キロずつのペースで、とうとう一日に四十二キロまで走れるようになった。

そして昨年の四月十二日、テリーはカナダの東の端、ニューファンドランド州セント・ジョンズで

大西洋の水に義足をつけたあと、「マラソン・オブ・ホープ」（希望のマラソン）のスタートを切ったのである。それから

後は、雨が降っても電が降っても、走り続けた。義足は何度もはずれ、痛み続けた。トラックがびゅんびゅん飛んできて、道から落とされそう

になったこともあった。

それでも彼は走り続けた。やがて、彼の行動に感激した人々から寄付が集まってきた。沿道の市町村が、いろいろな団体が、そして一般市民が寄付を申し出た。ラジオやテレビが特別番組を組み、テリーの呼びかけを応援した。

しかし「希望のマラソン」は予定の三分の二を過ぎた北部オンタリオの路上で中止となった。息をするのが苦しく、胸に痛みを感じたからである。ポート・アーサー総合病院で検査した結果、左肺が一部つぶれていることが分った。ガンが肺に転移していたのである。テリーは間もなくブリティッシュ・コロンビア州の病院に移され、化学療法を続けている。

現在までに集まった、あるいは約束された寄付金は、総額二十万ドルをこえた。この金は、テリーの希望通り、ガンの研究と研究者の養成のために使われることになっている。

彼の勇氣、意志そして献身に対して国中から賛辞が寄せられた。カナダ政府は、カナダでは最高の勲章を授け、その榮譽をたたえた。

## 革新的メディア論

## マクルーハン

トロント大学教授のマクルーハンは謹厳で生真面目な人物である。六〇年代の



半ばに彼はへすばらしいメッセージを持った人物」としてエレクトロニクスの世界に颯爽と登場した。世界は突如として線的思考の自己中心的な考え方の時代から「地球村」の時代へ変身したのである。



彼の理論（必ずしも彼の理論ではないかも知れないが）の一つの解釈によれば、世界は活字の発明によって根底から変わってしまったというのである。本（あるいは本屋）が存在する以前には人々は自分がまわりの世界の中心だとは考えなかつた。自分の村の絵を描く時にはそのすべてを描いた。人間も物も、壁の内側にあるものまで、つまり、屋内にあるものも屋外にあるものもなにもかも描いた。彼の心の中では自分が絶対的な観察者なのではなくて、単なる総体の中の一部に

すぎないのである。

活字の出現（やがて視界いっぱいには拡げて読む新聞が登場する）が人間を自己中心的にし、とりわけ資本主義を、頑固な個人主義を、スーパースターたちを、自殺を生み出した。綴り字がやかましくいわれるようになり、社会の敗残者が発生する。

活字（ホットなメディアである）はルネッサンス時代の人々の自意識を目ざめさせ、ひどく理窟っぽくした。彼らはあらゆるところに、時にはそんなものがあるはずのないところにまで因果関係をこじつけるようになった。

これが各地で起った魔女、異教徒、作物を荒らした者たちの焚刑の原因である。マクルーハンの考えによると、人々を自分を中心にいる活字の世界から引きずり出してくれたのは、テレビ（これはクールなメディアである）である。その小さな箱の中に人が見るものは、見ている人のことに一切注意を払わずに必死に何かをやっている他人の姿である。かくてテレビを見る人はもはや批判的な観察者ではない。その他大勢の中の一人となるのである。

マクルーハン氏は昨年十二月三十一日、トロントの自宅で病死した。六十九才だった。一昨年脳出血で倒れる前の同氏は、大脳の右半球と左半球の機能について関心を抱いていた。研究によれば右半球は空間的、情緒的、直観的なプロセスに関係をもっており、左半球は言語、因果関係、知的分析的な思考を受け持つという。

## したわれる日系二世の医者

### 宮崎政次郎

ブリテイッシュ・コロンビア州のバンクーバーから北東へおよそ七、八〇キロのところにはリレットという小さな町がある。山また山という山岳地帯の谷間にあって、かつては太平洋沿岸からカリブー金鉱へ通じる山道の宿場町としてにぎわっていたところである。

宮崎政次郎氏はこのリレットの名譽市民であり、この地区の歴史学会の元会長であり、またカナダ勲章の受勲者でもある。日系カナダ人や、その他の宮崎氏を知る多くの人々の間では、ドクター・ミヤザキとして親しまれ、尊敬されている。

宮崎氏は一八九九年（明治三二年）、



滋賀県彦根市開出今町（昔は村）で生まれ、十三才のときカナダへ渡った。その後、生活費をすべて自分で稼ぎながらハイスクール、大学（ブリテイッシュ・コ

ロンビア大学、ミズリー州カークスビル医学大学）へと進み、バンクーバーで開業する。「カナダの萬歳物語」（森研三、高見弘人共著）は、宮崎氏についてこう記している。

「一九三〇年から一九四二年までバンクーバーで患者を診ていたが、その後ブリッジ・リバーとミント及び東リレット地方へ移った。戦争のため退却させられた日系人同胞を治療のため、ブリッジ・リバーへ強制的に送られた。

一九四四年暮、リレット町のピーター・パーターソン医師が死去したため、同町は無医師になった。このためB・C州のセキユリティー（保安）委員会は、日系人ながら信頼のおける宮崎ドクターをリレットに移らせ、町民の診察と治療に当たらせ、同医師は翌四五年三月三十一日以後同町で、まことに献身的な診療をつづけた。

このような行為が町民の絶対的な信頼となり、一九五〇年十二月、宮崎ドクターは町議会に当選した。日系人として町議になったのは同氏が最初であり、同胞に自信と勇気を与えた。（註・カナダの町議や市議は、定数が日本よりうんと少なくて権威がある。）

その後、一九七〇年三月二十一日、当時の総督ミッチナー氏からボーイスカウトに貢献した実績で功績勲章を受けることになり、B・C州副総督より叙勲された。

宮崎ドクターはB・C州奥域のボーイスカウト理事会会主事である。一九七〇年



九月二十五日、リルエット町でフリーマン（名誉町民のようなもの）に推挙されて表彰、晩餐会が催された。そして一九七七年、オーター・オブ・カナダ勲章が授けられた。

なお、日系人のカナダ勲章（オーター・オブ・カナダ）受勲者としては、宮崎氏のほか、故北川源蔵氏（滋賀県彦根市出身、実業家）、デビッド・スズキ氏（生物学者、テレビ番組解説者）、トム・シヨーマ氏（前連邦政府大蔵次官）、佐藤伝氏（福島県棚倉町出身、バンクーバー日本語学校名誉校長）、桑原キナ女史（生け花師匠）などがいる。

## ケベックの劇作家

### ミシエル・トランブレ

でっぷりとして、穏やかな人柄のミシエル・トランブレは、三十五年前モンリオールのとある品の悪い街に生まれた。そこにいるのは女ばかりで若い男はごく少なかった。

街と時代と環境が彼に深い影響を与えたにちがいない。彼はケベックの指導的な劇作者への道歩んでおり、人生の細部にひそむ真実の力強い代弁者である。彼の処女作「善良なる人々」は一つのセンセーションだった。明らかにその原因は、ケベックの大衆の言葉であるフランス語のケベック弁とでもいうべきジュ

アル（ケベックなまりのフランス語という意味。フランス語の馬ヘシユヴァル）がケベック方言ではジュワルと発音されるところからきている）で書かれていたからだ。それまで誰もそんなことをやっていた者はいなかったのである。しかしトランブレは実はもっと重要な点でオリジナルであった。ケベックは自らの存在のアイデンティティをずっと模索しつづけていたが、この戯曲はその混乱ぶりを反映



していたのである。一人のフランス系カナダ女性が、百万枚の景品券を集めて、近所の十四人の女たちに小さなノートにそれを全部貼りつけてくれるように頼む。スタンプ自体が騒ぎの原因の一つである。数の多さはうまく仕組みられた幻影であり、小さな景品を大きく見せる。全部合わせてもたかだか千ドルの値うちしかない上に、安物のプラスチックの景品としか替えてもらえないのだ。女に仕掛けられたトリックなのである。

トランブレの近作はどれもやはり女性

の見地から書かれている。例えば「ホザンナ」の場合は、変身の世界が描かれており、男性の肉体に住む女性がそこから抜け出そうとする作品である。

## ストレスの発見者

### ハンス・セリエ

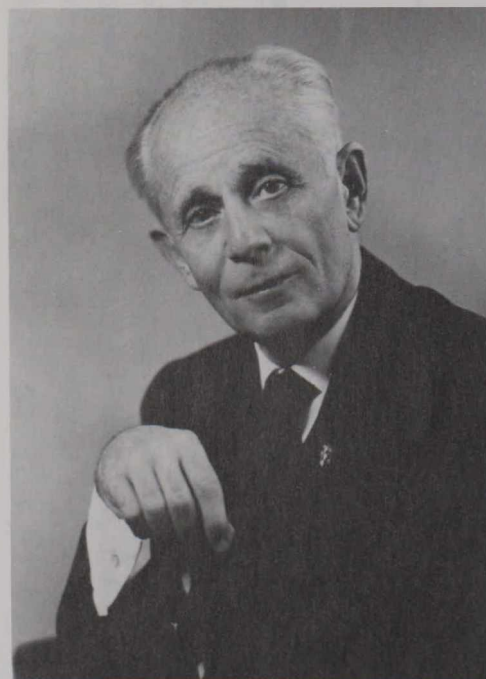
十九歳のハンス・セリエは、師であるフォン・セイセネック教授に対して次のように主張したことがある。臨床医は、気分が悪いというだけの症状にもっと気を配るべきだと思えます——と。

教授の答はこうだった。「気分が悪くなれば顔に現われるものだ。それは当然のことじゃないか。肥った人が肥ってみえるのと同じだよ」

ハンスは末梢的な事実によってまよわされることなく本質を見つめる精神の持ち主だった。この時

彼は、ストレス学確立のための第一歩を人知れず歩みはじめたのである。

十年後、彼はモンリオールのマツギル大学でJ・B・コリップ教授の助手として研究を続けていた。女性ホルモンに



彼は屠殺後間もない牝牛の卵巣から抽出したものをメスのネズミに注入してみた。未知のホルモンによっておこるかもしれない変化を観察していたのである。ネズミは反応し、副腎の拡張とリンパ組織の萎縮、胃潰瘍が全個体にあらわれた。

さらに彼は別の組織からの抽出物を同様にネズミに注入してみた。反応はまったく同様であった。しかし、明らかに性ホルモンは何の関係もない。その時彼はあの「気分が悪いという症状」のことを思い出したのである。

今度はネズミを研究室の屋根の吹きさらしのなかに置いてみることにした。一晩中真冬の寒さのなかに放置されたネズミには、そろって同じ症候群が認められた。副腎拡張、リンパ系の萎縮、潰瘍の兆候である。彼はさらに実験を続けた。いかなる種類のストレスを与えようとネズミの反応は一樣であった。コリップ教授の方では、一度じっくり話をする必要を感じた。セリエのやり方は時間のむだ



ではないか。「セリエ君、手遅れにならないうちによく考えてみたまえ。君はそんなつまらぬ薬学研究で一生を台無しにするつもりか」

幸いセリエにも支持者が一人いた。インシュリンの発見者フレデリック・バンティング卿である。卿は度々彼のもとを訪れ、援助としてまず五百ドルを送ってくれた。一九四四年にセリエは若干の成果を全米医学会報に発表した。一九五二年には「適応症候群」が出版された。今日では彼の生物学的ストレスの概念は全世界の医学関係の教科書に採用されている。

要約していうとこうである。人が何らかのストレスのもとにある時、その身体はある決まったやり方で反応する。ストレスには有害なもの（これをディストレスとよぶ）と、逆に高揚させるもの（ユーストレス）とがあり、例えば競馬で当たりをとったという知らせなどは後者の場合のストレスと考えられる。

ストレスは、家族間の、または仕事上の、あるいは社会的なタブーや伝統による抑制などからくる緊張が原因である。いわば、われわれの適応の仕組みをはたらかせる一切の生活状況がストレスを作り出すといってもいい。心理学的にみると、欲求不満、失敗、屈辱などといった経験が最もストレスを生みやすい。一方、勝利や成功などは、多くのエネルギーや刺激をもたらし、力と喜びを与えてくれる。この二つは明らかに違うものだが、生物学上の観点からは共に同一の

効果をもたらす。つまりストレスをおこすのである。ユーストレス（喜ばしい方のストレス）は苦悩にくらべると緊張と持続の度合いが少ないので、より有害でないといえるだろう。

### 静かなるカナダ人

## ウィリアム・ステファンソン

ウィリアム・ステファンソンは、写真電送を発明して、三〇才になる前にすでに百万長者になっていた。しかし、彼を有名にしたのは、写真電送の発明だけではない。

ステファンソンは、第二次大戦中、「イントレピッド」（勇敢な、という意）という名前で南北アメリカにおける連合軍の逆スハイ活動を指揮し、連合軍の戦勝に大きく貢献した。一九四五年、英国国王ジョージ六世はステファンソンに爵位を、また米政府は外国人としては初の大統領功労章を授け、彼の功績をたたえた。



Aquarius Studio

昨年四月には、英国海軍が新しい艦船に「イントレピッド」と命名。同船は本物のイントレピッド、ステファンソンが住むバミューダに寄港して、初顔合わせを行なった。八十五才。

### バレエ界の星

## フランク・オーガスチン

一九七二年、猛烈な完璧主義者ルドルフ・ヌレエフは、軽々と宙を飛ぶ一人の若い男性舞踏手に目をとめ、この男を自分の演じる王子フロリモンの代役に抜選した。この若者がカナダ・ナショナル・バレエ団のフランク・オーガスチンだった。この時以来、ヌレエフは彼の目標となった。

一九七三年秋のウィニペグで、ジゼル第二幕のさなかに突然オーガスチンの膝がピシッと異様な音をたてたが、彼はそのまま踊り続けた。後になって軟骨がくだけていることがわかった。除去手術はトロント病院で行なわれ、軟骨はオーガスチンのベッド傍の小さなガラス瓶の中におさまった。バレエ団の団長ジョアンヌ・ニスベット女史によると、それはちょうど「ぐしゃぐしゃにな



ったエビみたい」だった。膝はやがて回復したが、オーガスチンは一年間踊れなかったし、以前のような完璧な能力を取り戻せたのは一九七六年になってからである。以来彼は自らを克服し、国内はもとより、メトロポリタンで、ロンドンで、批評家の絶讃をあびながら踊り続けている。

彼は今もってヌレエフと同じ厳しさを自分自身を駆り立てる。オーガスチンは言う――「今私は自分自身のためだけに踊っているのです。批評家や着飾った観客や、もつといえはもし仮に女王陛下が臨席されたとしても、そのために踊ろうとは思いません。私自身のためだからこそ踊れるのだし、舞台上上るのは自分がそこにいたいと思うからです。そういうやり方ではじめていい演技ができるのです」

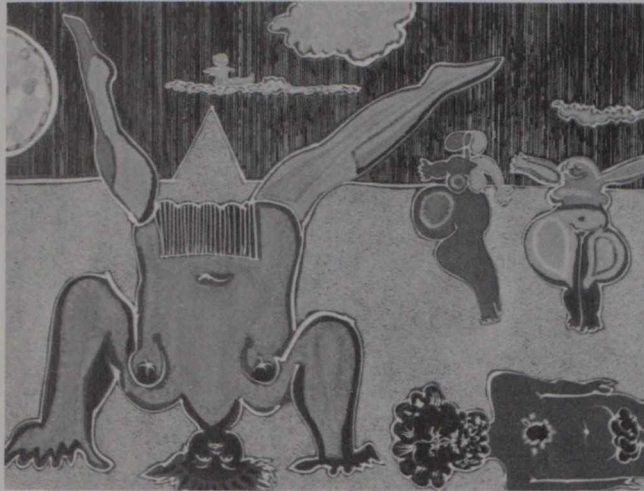


## 多才な画家

# ハロルド・タウン

かつてのハロルド・タウンはトロントの気の小さな若者の一人だった。

「美術学校に入る前の晩、ぼくはローナ・グリルにいた。そう、テカテカの髪に白いソックス、あの頃のなつかしい服を身につけて、顔付きはというと、バンドマン連中のまねをしてさも世の中に退屈しきったような表情をとりつづっていた。で、ある年上の女（といってもせいぜい二十二歳といったところだったろう）をひっかけることができたわけだ。彼女を家に送って行ったら、みんなもう



タウン作「世界パリエーションNo.75」

Yvan Boulerice, Canada Council Art Bank Collection

寝ているから、お入りにならない、と彼女がいう。内心うまいと思った思いながら入りかけて、突然足がとまった。首の飾りチェーンに締め上げられるように息が苦しくなつて、思いがけずぼくはしゃべった。ぼく、行かなくちゃ。あした学校が始まるんです。朝早いです。」

明けておめでとうござ  
います。ご健康を祝し、カナ  
ダと日本の関係がさらに深  
まることを祈念します。

カナダ大使館一同

のちになって、時間を守ることはマジメ人間の美点であることをハロルドは知った。彼のような人間は自分の時計の音にあわせて歩調をとる以外ないのだ。

タウンは一九五〇年代にトロント近辺で活躍した抽象表現派の画家たちのグループ「ペインターズ・イレブン」の創始者の一人で、彼の作品はこれまで各地の国際的展示会で紹介されてきた。多才かつ独創的な彼は、図画、油絵、版画、コラージュ、彫刻と各方面で才能を發揮、一九五〇年代には版画を通じて流麗な図案家であると共にグラフィック・アーティストとしてすばらしいデザイン感覚をもっていることを示した。作品としては、アクション・ペインティングの手法を使った巨大な抽象壁画（一九五八年）、黒、銀、白の三色による連作「Tyranny of

the Corner」、あるいは色調豊かな名品「The Great Divide」などがよく知られている。著書も多く、カナダの芸術界の大御所である。

## 日系の建築家

# レイモンド・モリヤマ

モリヤマ（森山）氏については、森研三、高見弘人共著「カナダの萬歳物語」が紹介しているから、それを引用させてもらうことにしよう。

「カナダには世界的に名の知られた建築設計家が二人いる。一人は、一九七〇年の大阪万博にカナダ・パビリオンの設計で一等に入選したバンクーバー在住のエリックソン氏。もう一人はトロント在住で、日系人二世のレイモンド森山氏である。

バンクーバー生まれ

れの森山氏は、トロント大学建築科を優秀な成績で卒業した。まず腕試しに設計したのが、日系人の総力で資金を集めて完成させたトロント市の「日系カナダ人文化会館」で、その見事なデザインによって一躍クローズアップされた。

その後、オンタリオ州政府が、カナダ



建国百年記念で計画した「科学センター」を設計した。建築費約百億円。ケタはずれの子算が超過したため閣着が起きたが、野心的で、しかも、地形を巧みに利用した「科学センター」は、米加両国にない珍しい構造として、このコンクリート建築を見事に完成させた。

いまやレイモンド・森山氏は、トップクラスの建築家として、彼の設計・監督を依頼する事項が次々と舞い込んできている。

ナイアガラ・フォールズ町近くのセント・キャソリンズにあるブロック大学の「大講堂」を設計、トロント市に近いスカボロの「市庁舎」も設計し、さらにオンタリオ州ロンドン市の図書館も設計した。そしてカナダ最大の都市トロント市

の中央図書館も設計、見事に完成させるという人気建築家となっている。このほか、ヨーク大学理学部の校舎、グローバル・テレビ局など斬新なセンスの建物は同氏独得の設計によるものである。」



一九七九年の夏、ニューフアンドラ  
ドに私が滞在中、島のテレビにあまり親  
しめなかったことを、前にこの欄で書い  
たが、カナダの元首相ジョン・G・ディ  
ーフェンベーカー氏（以下敬称略）が死  
去した際の一連の報道と追悼のテレビ番  
組だけは例外で、私はふしぎに心打たれ  
長時間テレビの前に釘付けになっていた  
ことを覚えている。

私はカナダの政治（家）に、もともと  
それほど関心をもっているわけではな  
い。時折の政権交代劇に対しても、私は  
遠く外野席から観戦しているくらいの気  
持ちしかもてない。それなのに、このデ  
ィーフェンベーカーという一政治家の死  
去の報道に、どうしてこう心動かされ、  
哀惜の情を禁じえなかったのだろうか、  
自分でもよく説明できないのである。一  
度、私はオタワの街頭で、当時野党党首  
だった氏の姿を見かけたことがあるだけ  
で、もちろんなんの面識もない。しかし、  
どういうわけか、カナダの政治家の中で、  
ディーフェンベーカーは私にとっていち  
ばん印象が深いのである。

氏は政治家として必ずしも不遇だった  
とはいえないかもしれない。一九五七年  
に二十二年ぶりにカナダに保守党政権を  
もたらし、六三年の選挙に敗れるまで  
数年間首相の座を占め、その後は野党党  
首あるいは政界長老として重んじられ、  
死去に際しては国を挙げての哀悼を受け  
たのだから、カナダの政治家としては、  
功成り名遂げた一人だったといっても過  
言ではあるまい。

しかし、この政治家には、なにか挫折  
と敗北のにおい、ドン・キホーテ的な悲  
壮感と時代遅れの滑稽感といったような  
ものが、終始つきまとっていたように思  
われる。ディーフェンベーカーという政  
治家がとりわけ私に印象が強いのは、私  
が一九六〇年代の始めにカナダへ留学し  
た時期が、ちょうど、ディーフェンベ  
ーカー政権の末期にぶつかっていたからか  
もしれない。カナダへ渡る前からカナダ  
の首相の名前くらいは知っていたが、ト  
ロントに到着した留学生の私を驚かせた  
のは、この首相のすさまじいほどの悪評

## 消え去った夢

——政治家の死をめぐる——

ぶりだった。新聞の論調は批判的という  
より攻撃的だったし、漫画や小説などす  
べてディーフェンベーカーを標的にして  
いる感じだった。当時、下落しつつあつ  
たカナダ・ドルまでが、「ディーフェン  
ドル」とあだ名をつけられる始末。自国  
の首相を軽蔑し嘲笑するのがあたかもイ  
ンテリの標識であるかのごとき雰囲気  
が大学などにあつた。あごを左右にふるわ  
せ、「わが同胞カナダ人諸君」と呼びか  
けるあの独特の仕草も、ものまねや嘲弄  
の対象になり、さながら国を挙げてこの  
首相を政権の座から引きずりおろすのに  
躍気になっているかのごとき空気に、私

は少なからず驚き、面食らったものだっ  
た。その後もディーフェンベーカーの人  
気は下降の一路を辿り、とうとう六三年  
選挙の大敗となり、ディーフェンベカ  
ー時代は終止符を打たれることになった。  
しかし、これだけの悪罵と嘲弄の中でつ  
いえ去った政治家が、いざ亡くなってみ  
ると、予想外に国民の敬愛を受けていた  
ことが判明するのである（首相時代はる  
かに尊敬されていたはずのピアソン氏の  
死は、これほど悼まれなかったように思  
われる）。この間の事情は、必ずしも説明  
しやすくはない。

平野敬一

一九五八年の記録的な圧勝があつたに  
もかわらず、成立したディーフェンベ  
ーカー政権は、悲劇的といえるほど惨た  
んたる行程を辿った。悲劇は、どこにあ  
つたのか。一つは、ディーフェンベカ  
ーがかかっているナシヨナリズムの旗幟  
が、もはや時代の流れに合わなくなつて  
いたこと。さらに氏がそれに呼びかけ、  
自分の支持層とみなしていた一般大衆が  
有効な政治勢力として、もはや機能しえ  
なくなつていったこと、などが考えられる。  
ディーフェンベーカーは、すぐれた大衆  
政治家（ポピュリスト）であり、ナシヨ  
ナリストであつたが、大衆政治もナシヨ

ナリズムも、すでに時代の趨勢ではな  
かつた、ということになるか。いや、時  
代の趨勢といつても、それは要するにア  
メリカ（の資本と企業）との一体化を求  
めるトロント財界（つまり東部エスタブ  
リッシュメント）のお気に召さなかつた  
というだけのことさ、としたり顔に私に解  
説してくれた知人もいた。あるいは、そ  
ういうことだったのかもしれない。

とにかくディーフェンベーカーは政治  
家として敗れ去つた。しかし氏の敗北は、  
たんなる一政治家の敗北ではなく、カナ  
ダ・ナシヨナリズムの敗北であり、「ネ  
ーションとしてのカナダ」の消滅（即ち  
「アメリカ帝国」への同化）を意味するも  
のだったと指摘し哀悼をささげるのは、  
他ならぬカナダの（おそらく唯一の）哲  
学者ジョージ・グラントである。ディ  
ーフェンベーカーの死が、予想外に人々に  
悼まれたのは、氏と共にものと大きなも  
の（カナダの夢？）が消え去つたことを、  
カナダの民衆がこの哲学者とは別の次元  
で、本能的に感じとっていたからかもし  
れない。

去る十二月に東京で開かれた日本カナ  
ダ学会の年次大会ではカナダのナシヨナ  
リズムが統一テーマになっていたが、デ  
ィーフェンベーカーが象徴し、彼と共に  
消え去つたナシヨナリズム（の夢）は、  
ついに表立った議題とはならなかつた。  
大会が終つた今ごろになって、私は、し  
きりにそのことが残念に思われるのであ  
る。

（東京大学教授）



80年代の  
日加交流

橋田忠明

いささか旧聞に属するが、昨年五月の故大平首相のカナダ訪問の際に、その日彼らは故大平首相一行を待望していたのではない。「我々にとっては記念すべき集いがあるのですヨ」と取材先のカナダ外務省のA氏がこっそり打ち明けてくれた。東京のカナダ大使館や企業に長い間駐在していた「日本ファン」のカナダ人有志が初めて一堂に会し、旧交を温める計画だというのである。

よく聞いて見ると、ランキン駐日大使夫妻が一行とともに帰任するので、オタワで集まって、盛大にパーティを開き、日本のことや帰国した後のカナダでの仕事振りを披露し合うという興味深い試みである。「今回はオタワ周辺の人たちにしぼったが、それでも二十人はこえると思う」とA氏は胸をはずませていた。

確かにこのところ、日本でなじみの深いカナダ政府の高官やビジネスマンたち

の帰任が目立つオタワ、トロント、モントリオール、バンクーバーなどで、在日期間の長いこうしたカナダ人が色々と話題になりだしている。

たとえば、カナダ大使館で長く勤め、日本語も堪能なタークセン氏。カナダ外務省に帰任して一年近くになるが、「省内で余り日本の素晴らしさをPRし過ぎたので、『日本シンパ』のレッテルを張られかねない有様。上司から日本のことは一時忘れよ、とクギをさされて弱っています」と苦笑する。家族は「望郷の念(?)」しきりで、奥さんまでが「東京に帰りたい」と時折り口ごもるといふ。同氏は対日関係とは全く別の部署だが、日本のこととなると必ず声がかかるそうだ。

「カナダの叛乱」で有名なケベック州にもいる。州政府の国際担当のベルニエ氏。陽気で、話し好きな仏系カナダ人。同氏の部屋を訪れると、日本的な静かな雰囲気。ベルニエさんも日本流の奥の深い物腰を尊重しているらしく、話し振りまで日本的な紳士を感じさせる。

「数年振りに帰って、ケベック独立の嵐を肌にした。見聞きする何もかもが新鮮だ。だが、州政府やモントリオールの関係者たちと話し合っていると、余りにも日本の現実を知らないで、観念でとらえる面に気付く」と指摘する。同氏はケベック州が独立をバックに海外で最も力を入れようとしている日本、東南アジア各国の担当を志望し、「東京駐在の間に州政府や企業トップに幅広く人脈を築い

たので、それを有効に生かしてケベック州に『日本革命』を起こしてみたい」とデッカイ構想を披露していた。

カナダ外務省の広報担当のアンドレ・シマード氏も隠れた「日本通」である。クリスマス・シーズンともなると、同氏の部屋は日本からのカードで埋まる。「重要なセクションなので、分けへだてができないが、日本からの記者が取材に来ると何かしらホツとする」というほどの日本びいきだ。

カナダでの取材先の友人の一端を紹介しただけだが、各地に、こうした日本人がよく知り、日本を愛して帰国したカナダ人がふえている。大学の先生にも多い。そうした人たちと話していると、日本では欧米各国に比べて、まだ知られていないカナダのPRに苦心し、いつも日本とカナダの文化の比較を考えてきた点が共通しているようだ。そして、日本でのカナダ理解に歯がゆかったように、カナダに帰ると今度はカナダ人の日本理解の少なさに不満を感じている様子だ。とりわけ、カナダに欠けている日本の歴史や伝統文化に造詣を培って帰った人が多く、公けの場や日常生活で日本文化をPRして貴重な存在になっている。

それと、驚くべきなのは誰もが日本語を話せる点である。取材先のひとりには「日本に駐在している折りに、日本語を勉強しない米国人や欧州人を多く見た。だが、本当に日本を勉強するには日本語を身につける必要がある。カナダ人は割合この点努力していると思う」と胸を張った。

それが、オタワや州政府の日本担当の人たちにロコミで伝わり、夏休みを利用して日本語を勉強する空気が広がっている。

日本とカナダの外交関係は故大平首相の訪問以来、八〇年代の新段階に入ろうとしている。今年七月にはオタワ・サミットが開かれ、カナダが脚光を浴びよう。トルドー首相やマクギガン外相は「三方位外交」を打ち出し、米国、欧州とともに、日本など東南アジアに新しく主力を注ぎようとしている。ことにトルドー首相は他の友好国がレーガン米大統領の政策の分析に奔走している間に、中近東、中南米を歴訪し、外交経験の長い宰相のしただかきを見せた。今年からは対米協力を主軸にしながらも、一味異なった外交を推進していく方針という。その中で、日本など「環太平洋圏」は主要な位置づけを与えられよう。

混乱する国際政治に、首脳外交も重要ではある。だが、一国の文化、社会、歴史はその国に住んでみないと本当に分らないという点も事実である。これからの日加交流には政治、経済だけでなく、社会、文化に対する相互理解がこれまで以上に欠かせなくなる。カナダで取材していて、ひとつの提案がある。カナダと日本で長期間滞在した官民の人たちを組織化し、両国の交流にパイプをつないだらどうだろうか。最近、相次いで帰国するカナダの友人たちを取材しながら、このことを切に思う。



## 編集後記

○一九八〇年代も早や二年目。今年はオタワで経済サミットが開かれるほか、憲法問題がカナダ国内の的焦点となるでしょう。いろいろな分野で連邦政府と州政府の役割や権限が新しく規定されるため、個々の修正条項に対してはそれぞれの利益や思惑がからんで抵抗も大きいようですが、できるだけ早く、すつかりした形で決着をつけて欲しいものです。憲法のカナダ移管と改正によって、カナダの飛躍が期待されます。

○今号はカナダの人物をとり上げました。日本ではいずれもあまりなじみがうすいかもしれませんが、カナダにもこうした多彩な人物がいる（当然ですが）ことを知り、カナダにより親しみをもつていただければありがたいと思います。

○今年はカナダの連邦・州関係や教育事情などをとり上げていく考えです。変わらぬ愛読とご協力をお願いします。

(吉田)

本紙中の意見や見解は、必ずしもカナダ政府またはカナダ大使館の考え方を反映するものではありません。また公式文書の翻訳は仮訳です。転載の際は、できるだけ出典を明らかにして下さい。ご意見やご希望は左記の住所にご連絡下さい。

〒東京都港区赤坂七丁目三十三

カナダ大使館広報部

動物のすね骨で滑走部(今日のブレードに当る)を作り、それを革ひもではきものに結びつけてすべつたという。

骨製のブレードはやがて骨に鉄わくをつけたものになり、完全な金属製のブレードにかわった。これをブーツのかかとにねじで止めるか、靴底に留め具とめて革ひもで結んだ。

ところがこれではいかにも面倒くさい。そこでジョン・フォアブスというノバ・スコシアの青年が思

いついたのは、革ひもや留め具のいらぬスプリング・スケート。リンクが作られ、今日のアイスホッケーが発展したのは、このスケートの発明に負うところが大きい。

これはブレードの上端に鉄製のカギをつけ、スケートをわずか一分以内でブーツに装着できるようにしたもので、しかもバネをブレードに止めているネジによってどんな長さのスケートでも靴に合わせて調整することができるという利点があった。

フォアブスが一八六八年に作り始めたこのスケートは見事に当った。このスケートは「Forbes Acme, Start Manufacturing Company, Dartmouth, Nova Scotia」の刻印が押され、世界一のスケートとして知られていた。



マルコーニなど当時の人々は、無線による通信は電気のスパークによってパチパチという音が起こる「ムチ打ち」効果によるものだと考えていた。しかしフェツセンデンはこの理論には真つ向から反対していた。無線電波は水に浮かぶ波紋みたいなもので、輪がだんだん広がっていき、ついには受信アンテナを取り囲むようになる、と彼は考えたのである。こうした波紋こそ電波を搬送するもので、音声の伝達はこれによって可能になる、と彼は主張した。

一九〇〇年十二月二十三日。彼の努力は実を結び、彼の理論は実証された。世界初の無線による音声通信に成功したのである。そして一九〇六年のクリスマス・イブの日、フェツセンデンは米マサチューセッツ州アラント・ロックにある通信所から、カリブ海にいる何隻かのユナイテッド果実会社の船に向けて、世界初のラジオ放送を行なった。フェツセンデンは短かくあいさつしたあと、ヘンデルの作品「ラルゴ」のレコードをかけ、それからバイオリンで「オー・ホーリー・ナイト」を弾いてきかせた——これが放送の内容だった。

## ●スプリング・スケート

アイス・スケートは、すでに一〇一五年頃の英国で人々が楽しんでたという。当時は動物の骨を靴の底にゆわえつけてすべつていたらしい。カナダでは、伝説によると、イロクオイ族インディアンが

## カナダ人の 発明発見 (VII)

### ●無線通信

グリエルモ・マルコーニは、一九〇一年の十二月十二日、ニューファンドランド州セント・ジョンズのある丘の上に立つて、世界最初の大西洋間無線通信を受信した。その日は木曜日であった。

翌週の月曜日になって、電信局の株価が落ち込みました。その晩、ニューファンドランドに出入りする通信を独占していたアングロ・アメリカン電報会社は、彼をこの島から「追放」した。

マルコーニを救援したのがカナダ政府。政府は彼に八万ドルを提供し、無線施設をノバ・スコシア州ケープ・ブレトン島のグレース湾に移動させた。これによって、カナダと英国間の無線通信が可能となった。

マルコーニはカナダ人ではなかった。したがって無線はカナダ人の発明ではないが、この革命的な発明にカナダもいくらか寄与したとは言えるだろう。

### 最初の音声通信

マルコーニが「トン・ツー」の信号を受信しようとしていた頃、カナダ人のレジナルド・A・フェツセンデンは無線による音声放送に成功しつつあった。